

カヴァイエスのスピノザ主義の再解釈の試み

——I'absolu d'intelligibilitéの肯定¹——

近 藤 和 敬

ジャン・カヴァイエス (Jean Cavailles, 1903-1944) は、二〇世紀前半のフランスに生きた最も重要な数学の哲学者の一人であることはよく知られている。彼の哲学は、「概念の哲学」という名のもとに、彼の死後、レジスタンスの盟友であったジョルジュ・カンギレムによって、またカンギレムの周辺においてルイ・アルチュセル、そしてミッシェル・フーコーらによって、構造主義の哲学の代名詞として参照されてきた。しかし、その詳細や一貫した体系の全貌が必ずしも明らかにされてきたわけではない。ここでは、その説明のために、彼自身や生前の彼と交流のあった人々によって繰り返し指摘されてきたカヴァイエスの「スピノザ主義者 spinoziste」としての側面について一つの新たな解釈を提示したい。

以前、筆者はすでに、『構造と生成Ⅰ カヴァイエス研究』（近藤 2011）においてカヴァイエスのスピノザ主義にたいする一つの可能な解

¹ 本稿は、科研費研究課題、基盤研究B「フランス・エピステモロジーの状況としてのスピノザ」（上野修代表）において行われた第一回研究会（於大阪大学、二〇一三年二月七日）での発表原稿を、一部の語句の修正と現時点での追記を加えたうえで掲載したものである。ここでの議論が上野修・米虫正巳・近藤和敬編『概念の倫理・主体の論理』（以文社）での拙論の基礎的な背景になっている。

釈を提示した。この解釈の最大の欠点は、カヴァイエスとスピノザの対応する文献的根拠を、スピノザの『知性改善論』の議論に限定していた点である。それにたいして、たとえば、Granger 1946 をはじめとして、カヴァイエスの哲学を、スピノザの『エチカ』と結びつける議論が以前から存在してきた (cf., Granger 1946, Gills 1993, Huisman 1993)。また、近年になって、以前はカヴァイエスとスピノザの思想的対応の解釈に対して否定的であったシナスール (Sinaceur 1984) も、カヴァイエスの手紙の分析やエチエンヌ・ボルヌとの往復書簡の分析 (Sinaceur 2009) を通して、カヴァイエスのスピノザ主義を『エチカ』との関係で解釈しようとしている (cf., Sinaceur 2002, Sinaceur 2004)。ただし、この解釈の欠点は、その対応が Sinaceur 2002 などでかなり具体化されたとはいえ、いまだ表面的なレベルにとどまっており、特にカヴァイエスの数学思想と内容的に関連していることの確証が得られていないことである。また、中村大介氏は、中村 2013 等において、カヴァイエスのスピノザ主義を、特に彼の博士主論文および副論文における抽象集合論および証明論形成史の分析の具体的な分析を踏まえたうえで、「概念のコナートウス」という観点から独自の解釈を提示している。ただし、そこでの対応も、スピノザの文献上の根拠に基づくものといよりも、内容上の類似的対応にとどまっており、いまだ充分なものとは言えない。

ここでは、以上の解釈的状况において、カヴァイエスの特に晩年の思想である『論理学と学知の理論について』（以下 L T S と略記）における「パラダイグム」と「主題化」のプロセスの具体的な数学的解釈と整合性を維持しながら、カヴァイエスのスピノザ主義を『エチカ』との文献上の対応において解釈する道筋を試みる。

1. 解釈において考慮すべき要素の提示

まずカヴァイエスのスピノザ主義の解釈を検討するために、カヴァイエスがスピノザの名に明示的に言及している文献資料を年代順に提示することから始めよう。

1. 一九二九年九月二七日付のジョルジュ・フリードマンへの手紙
(Ferrières2003 :77-78)
2. 一九三〇年一〇月七日付のボルヌへの手紙 (Sinaceur2009 :28) : ボルヌ1
3. 一九三〇年一〇月三二日付の家族への手紙 (Ferrières2003 :85)
4. 一九三〇年一月二六日付のボルヌへの手紙 (Sinaceur2009 :33) : ボルヌ2
5. 一九三四年三月一四日付の家族への手紙 (Ferrières2003 :114)
6. 一九三八年一月二四日付の家族への手紙 (Ferrières2003 :141)
7. 一九四三年頃執筆のLTS第一部一八頁 (Cavaillès1947 :18) : LTS S 1
8. 一九四三年頃執筆のLTS第二部三二頁 (Cavaillès1947 :32) : LTS S 2 (以上のなかでこの箇所だけ、スピノザの名が明示的に出ていないが、7との関係で参照が明らかであるため数え入れる。)

以上の箇所のすべてを同時に解釈の遡上に乗せることは、実際のところ、紙幅の関係上不可能である。というのも、カヴァイエスのスピノザ理解は、少なくとも以下の三つの文脈の複合として考えなければならぬからである。また、現在の解釈状況が混乱しているのも、以下の三

つを独立に検討していないことにも一因があるように思われる。

1. LTSでの数学および論理学の哲学の議論の文脈。
2. 二〇世紀前半のヨーロッパ圏でのスピノザ解釈の文脈（とくにフランス・ヴィックのそれとの関係を含む）。
3. カヴァイエス独自の宗教思想（「根本的合理主義 [rationalisme radical]」 (Cavaillès1925, p.132)）としてのプロテスタンティズムの背景にある思想的文脈、である。（2と3はカヴァイエスのなかでは特に密接に結びついているが、主題としては分離可能である。）

カヴァイエスのスピノザ主義の全貌を詳細に明らかにするためには、少なくとも以上の三つの文脈における彼のスピノザ理解の意義を明らかにしたうえで、さらにそれらのあいだの有意な関係性を解明することが必要となるだろう。それゆえに、ここでは、先に述べたように、その先駆けとして、上記1の文脈に議論を限定して、解釈を展開することとしたい。それ以外のものについては、適宜、その解釈の必要に応じてのみ参照することとしたい。

まず、カヴァイエスの7および8の文献箇所を引用しよう。

LTS 1 : 「必要なのは、観念の観念、というスピノザ主義的な重ね合わせ、superposition spinoziste de l'idée d'idée を合法なものにする知解、可能性の絶対性、l'absolu d'intelligibilité に依拠することか、あるいはその性質が真正の作用のなかで無媒介的にとらえられる産出的意識に依拠することか、このいずれかである。どちらの場合にしても、存在論的分析が必要であるように思われる。」 (Cavaillès1947 :18)

|| カヴァイエス 2013 : 23 : 傍点は引用者による : 以下同様)

LTS2…二つの係争「パラダイグムと主題化(引用者)」からなる二重の錯綜がみとられる。この錯綜の一方では、ふたつの係争が両方とも意味の同じ隆起から生じているだけでなく、そのうえ、第一のもの「パラダイグム」の抽象化が、第二のもの「主題化」を促進してもいる。「中略」この錯綜の他方をなしているのは、措定する意味が、すべての意味と同じように、縦断的な展開をともなう作用だということである。すなわち、どんな措定する意味も、同時に、ある別の作用の措定される意味でもある(このことは、どんな観念も、形相的実在性をもつという、伝統的な原理を想起させることができ(る)。かくして、深化する運動は、その口火が切られるや否や、ひとつめの種類の新しい連鎖を生じさせる。観念の観念、*idée de l'idée* は、無制限の重ね合わせによる損失を被ることなく、観念の観念が定義する平面のうえに、おのれの産出的力能 *puissance génératrice* を明示するのである。」(Cavaillès1947 :32=34)

「知解可能性の絶対性」は、カヴァイエスによるスピノザへの他の言及にも肯定的に表れる。たとえば、ボルヌへの手紙では、この「絶対性」が「神的なもの」であり、「スピノザ主義の存在論」とも関係つけて登場する。このことは、LTS1で「存在論的な分析」の必要性が指摘されることと合わせて考えられるべきであるだろう。

ボルヌ1…「概念のなかにさえ、すくなくともある概念から別の概念への移行において、神的なもの *du divin* が存在しているのです。

カヴァイエスのスピノザ主義の再解釈の試み

そしてこれこそが、不完全ではありますが、スピノザ主義の存在論なのであって、知解可能性の、理性の絶対的な価値が決定的に肯定しているものなかにあるのです。」(Sinaceur2009 :28)

このボルヌ1についての解釈は、ここでは追求しない。というのも、この解釈は明らかに、神学者であるボルヌに対してカヴァイエス自身の合理主義的信仰を説いているものの一部であり、それゆえ、その適切な解釈のためには、複雑な神学的、宗教文化的な背景を参照しなければならないからである。ここで、この箇所を引用したのは、もっぱら、「知解可能性」と「絶対性」という語が、カヴァイエスにとって、明らかにスピノザの理解と結びついていることを確認するために過ぎない。(cf. Sinaceur2009 :33)。

「観念の観念」という語と直接かつ明示的に関わるスピノザのテキストは『知性改善論』における次の箇所である。

TIE1…「三七…従つて方法は必然的に推論の仕方や理解の仕方について語らなければならない。「中略」むしろ方法は、真の観念を他の諸知覚から区別し、その本性を探求し、以て真の観念がいかなるものであるかを理解することに、「中略」存する。」²

TIE2…「三八…このことから、方法とは、反省的認識あるいは観念の観念、*cognitio reflexiva aut idea ideae* 以外の何者でもないといふ。以下、スピノザからの引用は、すべて岩波文庫版の邦訳に全面的に依拠する。

うことが帰結される。そしてはじめに観念がなくては観念の観念がないから、はじめに観念がなければ方法があり得ない。この故に、与えられた真の観念の規範に従って精神がどのように導かれるべきかを示す方法が正しい方法であることになる。なおまた、二つの観念の間にある関係は、それらの観念の形相の本質の間にある関係と同一だから、これからして、最高完全者の観念の反省的認識が他の諸観念の反省的認識よりすぐれているということが生じる。言い換えれば、最も完全な方法は、与えられた最高完全者の観念の規範にいたがつてどのように精神が導かれるべきかを示す方法であることになる。」

ただし、スピノザ研究においてしばしば言及されるように (cf. 上野 2005 :113、松田 2009 :65-66)、この「観念の観念」idea ideale とどう「重ね合わせ」を正当化する論証は、『エチカ』第二部の定理二〇の証明および定理三に見られる。さらにそれらの該当箇所を引用しよう。

E 1 : 「第二部定理二〇証明…思惟は神の属性である (この部の定理一により)。ゆえに思惟ならびに思惟のすべての変状について (この部の定理三により)、したがってまた人間精神についても (この部の定理一により)、必然的に神の中に観念があらねばならぬ。」

E 2 : 「第二部定理三…神のうちには必然的に神の本質の、ならびに神の本質から必然的に生起するあらゆるものの、観念が存在する。」

このエチカの該当箇所が、T I E 2 の主張の根拠をなしているという解釈は、既存のスピノザ研究に依拠するものであり、これについてのさらなる正当化はここでは議論の範囲の外におく。ただし、ここでの議論に必要な限りで、以上の二つの箇所が、T I E 2 の根拠となるという議論を松田 2009 の議論 (松田 2009 :63-68) によりながら再構成しておく。

E 1 において「観念の観念」に相当するのは、「思惟ならびに思惟のすべての変状について」の「観念」である。これが「必然的に神のなかにはあらねばならぬ」と言われている。この根拠として挙げられている定理三 (E 2) にある「神の本質」とは、すなわち「属性」によって表現されるものだった。したがって、延長や思惟やその他の無限にある属性から必然的に生起するあらゆるものの観念が、神のうちには必然的に存在する (つまり、それに対して人間の精神のうちには必ずしもあるとは限らない) ということが、E 2 において言われていることになる。つまり、この「あらゆるもの」には、思惟属性から必然的に生起する観念もまた含まれるので、ここから、E 1 の文言が導出されるということである。松田 2009 :49-5 が議論しているように、この規定は、再帰的な適用にたいして開かれていると解釈することができるかと仮定しよう。その時、「あらゆるものの観念」のうちには、観念だけでなく、観念の観念や、観念の観念の観念もまた含まれることになる。

「任意の思惟属性 C* に対して、C* を対象とする思惟属性 C C* が存在する。それゆえ、任意の基礎的属性 X について、思惟属性 C X、思惟属性 C C X、思惟属性 C C C X、…… (言わば、一階の思惟属

性、二階の思惟属性、三階の思惟属性、……)が存在する。」(松田 2009:64)

2. 解釈上の問題の構成

カヴァイエスのLTS一およびLTS二を、素直に、TIE2を参照しているものとして読めば、「観念の観念」とは「反省的認識」であり「方法」となるものである。ブランシュヴィックは、これと、「人間精神を構成する観念の対象は身体である」というエチカ第二部定理一三と「人間精神は、神の無限知性の一部である」という第二部定理一一系を合わせて読むことで、この「観念の観念」とは「精神」のことであると理解する。さらにブランシュヴィックは、この「人間精神」をカントの意味での超越論的意識と結びつけようとみなすことで、独自の新たなスピノザ解釈を提示した (cf. 近藤 2011:141n.133&135)。

しかし、このような解釈は、LTS二の「無制限の重ね合わせによる損失を被ることなく、観念の観念が定義する平面のうえに、おのれの産出的能力を明示する」という文言を説明することはない。ここで登場する「重ね合わせ」という語は、明示的なスピノザへの参照を伴うことなしに、カヴァイエスの様々なテキストの重要な箇所たびたび出現する (cf. Cavailles 1938a, Cavailles 1947a, Cavailles 1947b)。そこで一貫して言われるのは、既存の数学的振る舞いの形式化によって生じる新しい数学的振る舞いの場の形成と、その場による形式化された元の場とのあいだの「重ね合わせ」、あるいは構文論的な形式体系と、その意味論的な解釈のあいだの「重ね合わせ」である。特にLTS2の引用の前後では、

後で議論する「パラダイグム」と「主題化」によって形式化された平面のあいだに「重ね合わせ」が実現されること、しかもその平面の間の「錯綜」が存在することが言及されている。カヴァイエスは、この「産出的能力」およびその諸結果を肯定するためにスピノザに言及しているのだから、カヴァイエスのスピノザ解釈としての妥当性の条件は、このことを説明するものでなければならぬ、ということになる。

3. 解釈の提示と論証

3-1. 「共通概念」と「数学的認識」

まず、もっとも基礎的なこととして、確かにカヴァイエスの論じている数学的認識が、スピノザの意味での観念の一種であるということを確認することから始めよう。

E4:「第二部定理二三…人間精神を構成する観念の対象は身体である。あるいは現実に存在するある延長の様態である、そしてそれ以外の何ものでもない。」

スピノザのこの箇所を真であるとして引き受けるならば、数学に関する諸観念もすべて、たとえば数、集合、演算、関数、写像、図形、構造なども、すべて身体あるいは現実に存在する延長の様態を対象とする観念でなければならない。そしてカヴァイエスは、先に述べたような「無制限な重ね合わせ」が、このような数学に関する諸観念を形成すると考える。このE4に対応するカヴァイエスのテキストは次である。

MAF1…「感覚可能なもの、つまり無媒介的な具体的意識は、破棄されるわけではない。感覚的なものに働きかけることは、それから離れることではない（たとえば主題化によって得られるどのような抽象的対象も、初発の感覚可能なものになりたいする振る舞いにたいする…：振る舞いにたいする振る舞いである）。それゆえ、主題的な場合は、世界の外に位置するのではなく、この世界の変換なのである。」(Cavailles1938a:178-179)

このMAF1によって、E4に相当することをカヴァイエスが述べていることがわかる。しかし、この数学的認識は、カヴァイエスにおいて、知覚的なものや、想像的な観念とは明確に区別されている。たとえば、カヴァイエスはこれを「数学的経験」と呼び、その十全性という特徴を示している(Cavailles1938a結論)³。したがって、カヴァイエスの数学的認識の議論が、スピノザの哲学と対応をもつことを認めるためには、次に、スピノザの哲学のなかで、数学の観念が、どのような仕方では他の観念から区別されているのかを確かめなければならない。

スピノザの哲学の内部で、数学の観念の種別性を理解するとすれば、それを第二種認識によって得られる十全な観念として理解する道が存在する(柴田2005)。

3 ちなみに、口頭審査において、この「数学的経験」を擁護するために、カヴァイエスは「スピノザの守護」を求めたことが、6. 一九三八年一月二四日付の家族への手紙(Ferrères2003:141)に記されている。

「スピノザの考えをここでまとめれば、われわれの身体には「すべてのものに共通のもの」が与えられていて、その観念(共通概念)から形成される思惟の様式(第二種の認識…引用者)に則って数学的推論が可能になっているということになる。」(柴田2005:88-89)

すべての人間あるいは人間の身体を刺激するすべての外的物体に共通でかつ特有であるものの概念が存在する(第二部定理三八系および定理三九)。これが「共通概念」と呼ばれる。ところで、「共通概念」は、身体に由来する「普遍概念」を形成する思惟の様式と関わる。「普遍概念」が「感覚を通して」「もろもろの個物から」、あるいは「もろもろの記号から」形成される場合、「意見もしくは表象」あるいは「第一種の認識」と呼ばれるの⁴にたいし、「共通概念あるいは十全な観念を有することから」形成される場合には、「理性あるいは第二種の認識」と呼ばれる(エチカ第二部定理四〇系二)。そして、前者の認識が「誤謬の唯一の原因」であり、後者の認識は(第三種の認識とあわせて)「必然的に真である」と言われる(エチカ第二部定理四一)。したがってTIEEをここで参照すれば、真なる観念を与えることのできる方法は、第二種の認識(および第三種の認識)としての思惟の様式であることになる。

ところで、このような「共通概念」に相当する考えは、カヴァイエスのテキストのなかで見出すことが可能である。

MAF2…「事物に関する(より完全な意識を要求する)実効的な思惟は、その対象に関する思惟である(ある複数性についての十全な思惟は、その数についての思惟である)。」(Cavailles1938a:179)

ここで言われる「実効的な思惟」は、他の観念から区別された「十全な思惟」であると言われる。ただし、このMAF2を書いた時点（一九三八年以前、一九三六年頃）では、この「実効的な思惟」＝「共通概念」という特徴づけ、すなわち「すべての人間あるいは人間の身体を刺激するすべての外的物体に共通でかつ特有であるもの」という規定は、まだ行われていない。それがはつきりと出るのは、LTSでカヴァイエスがフツサルを批判する議論において、フツサールの用語のなからそれに対応するものを肯定的に受け継ぐときである。

LTS3…「数学者は、あらゆる対象に関わるものを、すなわち多multiplicitéの抽象的要素を記述し、肯定するのでないのだとしたら、数学者はいったいなにをしていることになるのか？じつさいに抽象化は、一般的に、ある理論の操作的な体系との相関関係のなかで特殊化される。他方では、このようにして到達される対象は、「中略」不定元Xなのではない。そうではなくて、そこでの対象は、フツサールが「範疇的存在者Kategorialien」と呼んだものであり、その複雑さの高度なものが、変項、関数、集合、操作などになるのである。」(Cavailles1947a:62=47)

すなわち、数学的認識は、「共通のもの」、すなわち「あらゆる対象に関わるもの」＝「範疇的存在者」についての観念である。そしてこれが、数学的認識に、他の不十全な認識にはない、特権的な種別性を付与していることと理解することができる。そして以上の箇所から、カヴァイエスの

論じている数学的認識が、スピノザの意味での「共通概念」に依拠する認識、すなわち第二種の認識と対応すると解釈することができることが確認できた。

3-2. 「形相的有」と「形相的実在性」

「観念の観念が定義する平面のうえ」で明示される「おのれの産出的力能」とは、カヴァイエスの数学の哲学的根本的主張である「数学は予見不可能かつ自律的な生成である」という文言の哲学的な内実を表しているものと考えられる。そして、このことを言うために、カヴァイエスはあえてLTS2で「どの観念も形相的実在性をもつ」という「伝統的な原理」に言及していた。このことは、スピノザのE1および次のE3に関係している。

E3…「第二部定理五…観念の形相的有は、神が思惟するものと見られる限りにおいてのみ神を原因と認め、神が他の属性によって説明される限りにおいてはそうではない。言いかえれば、神の属性の観念ならびに個物の観念は観念されたもの自身あるいは知覚されたもの自身を起成原因と認めずに、神が思惟するものである限りにおいて神自身を起成原因と認める。」

スピノザの「形相的有」esse formale＝カヴァイエスの「形相的実在」realité formelleという解釈が成り立つと仮定しよう。ところでスピノザの言う「形相的有」は、神の思惟属性から生じる無限知性のなかで、原因となる思惟の様態である観念と結びついている限りにおいて肯定され

る観念の存在とみなされる。そして、「観念の観念」は、神のうちには必然的に存在するのだから、「形相的有」とは、この神のうちに必然的に存在する「観念の観念」の存在性格と考えることができる。

この「形相的有」を持たない観念と、それを持つことが認められていない観念の違いは、単なる事物とともに知覚された球の観念と、半円の回転という観念を原因とすることで産出された球の観念との違いに等しいものとして理解することができる。つまり、後者の十全な観念についてのみ、「形相的有」が認められるということである。また、後者による認識は、「第二種の認識」に属し、前者による認識は、「第一種の認識」に属するとされる。

このことは、観念は、それが知覚するものによるのではない独自の存在性格が認められるということである。そして、この「形相的有」が肯定されることによって、カヴァイエスは、「深化する運動は、「中略」おのれの産出的機能を明示する」ということを肯定できるようになると考えていると解釈することができる。なぜなら、まさに観念の「形相的有」が、観念の事物的原因に還元できないということとは、たとえば、次のようなことを肯定するからである。すなわち、単に算術の具体的な計算体系のなかで把握された結合律

$$1+(2+3)=(1+2)+3$$

と、抽象代数学において把握された結合律

$$a*(b*c)=(a*b)*c$$

のあいだの差異である。そして、「形相的有」の肯定は、後者を前者とは異なる平面上の「主題系」として把握しなすことを可能にする。つまり、後者を、算術の加算から独立した体系と構造をもつ半群としてみ

なして、それを直接探求する平面が開かれるということである。

このようなカヴァイエスのスピノザ理解に関する解釈上の問題点は、『エチカ』において肯定された $a*c$ と $c*a$ のあいだに、肯定的な内容的差異を、いわば、「産出的機能」の結果を見て取ることができるか、ということにある。

ところで、このことを『エチカ』のなかで直接的に肯定することは不可能であるかもしれない⁴。しかしながら、それを間接的に肯定することは、『エチカ』の議論と論理的に矛盾することはないだろう。もしそれが直接的に肯定できないとしても、それは『エチカ』の議論の目的にかなわぬがゆえに言及されていないだけであって、もし仮にスピノザが科学方法論について書いていたなら、言及されていた可能性があることが推測できる。たとえば、『知性改善論』では次のように言われていた。

4 【二〇二〇年一〇月の追記】この原稿を書いている時点では、『エチカ』の既出部分しか念頭に置いていなかったが、『政治論』における議論や、それに関する『エチカ』の関連部分を念頭に置くのであれば、複合的個物もそれ自身の精神をもち、その精神は、その複合的個物を構成する下位の個物の精神（すなわち個物の観念）とは直接には交わらないということから、この平面の差異は、まさに観念の単なる後退的な重ね合わせではなく、延長的な差異をとまなう観念の実質的な重ね合わせであると解釈する道もあることを追記しておきたい。いかなる上位の観念にもそれ固有の「振る舞い」が伴うというカヴァイエスの議論は、エピクロスの意味でより唯物論的に読むことができるかもしれない（思考の対象はアトムであり、思考はアトムと同じ速さで運動する）。

TI E 3…「四〇」…「略」ところで、精神は、自然について理解することが多ければ多いだけ益々よく自らを理解することが自明であるから、ここからして、方法のこの部分は、精神が理解することが多ければ多いだけ益々完全であり、又精神が最高完全者の認識に向かう時、すなわちこれを反省する時、最も完全になるということが確かである。」

『エチカ』において必要なことは、「最高完全者の認識」から理解されるべきことがらを展開することであって、ますます多くの自然について理解することから理解されるべき精神自身を展開することではない。ただし、後者は前者に存在論的根拠において依存する。この場合であれば、具体的な ∞ と ∞ のあいだの内容的な差異を肯定することが可能であるのは、そもそも ∞ や ∞ や、それ以上のものが確かに存在しているという存在論的確定によって基礎づけられるからである。L T S 1でカヴァイエスが「知解可能性の絶対性」に依拠することで、「觀念の觀念の重ね合わせ」が合法化されると述べるのは、この論証関係が関わっている。つまり、「知解可能性の絶対性」とは、スピノザの意味での「思惟するもの」としての「神」であり、いわば「間接無限様態」としての無限知性となった神が存在するということである。そして、これによって初めて「形相的有」が認められるということは、すでにみたとおりのである。そしてこれに依拠することで、「無制限の重ね合わせ」が正当化される。

それでは、なぜカヴァイエスは、『エチカ』のような順序で論証することなしに、数学の歴史を認識論的に分析するという態度をとり続けた

のか。それは、おそらく彼の宗教観とも関わることであろうが、有限な人間の観点と無限な神の観点のあいだで生じる弁証法的な運動、つまり、失敗や特異なものを乗り越えることで、觀念や意識が生まれ変わり、刷新されると考えているからだと理解することができる。ポルヌ1でみたように、まさにその移行においてこそ、神的なものが存在しているのであって、合理主義的立場を維持する以上、この先に踏み越えることができない、あるいはもしその合理主義を極限へと導くとするならばスピノザのようなやり方以外はないと考えていたからではないか。

言いかえれば、カヴァイエスは、スピノザが『エチカ』の議論の目的上、議論することのできなかつた事柄について、存在論的にはスピノザの議論に依拠しながら、認識論的（あるいは経験的）な観点から新たな議論を展開させたのだと理解してみることである。⁵

それでは最後に、カヴァイエスが、スピノザの『エチカ』の議論と矛盾

5 本論の筋からは離れるが、この『エチカ』における存在論的論証と、『知性改善論』における認識論的な議論の関係は、ちょうど数学における任意の選択関数の存在主張を含む公理的集合論に関する議論と、その他の具体的な代数や位相や解析学や確率などの議論との関係と重なるかもしれない。選択公理によってはいかなる具体的な選択関数を指定することもできないので、それによって各分野での具体的な問題を解決することこそしないが、何らかの具体的な選択関数の存在が主張される場合、その根拠それ自体が、選択公理を含む集合論は議論しているとみなすことはできる。ただし、カヴァイエスはこの数学上の関係（つまり、公理的集合論とは、数学における『エチカ』であるという関係）に明示的には言及していない。しかしながら、彼の集合論への関心やそれについての正当化の議論などは、この観点から再検討することができるかもしれない。この点は今後の課題として残す。

盾することなく、また存在論的にはそれに依拠しながら、特に科学方法論として何を新たに付け加えたのか、ということをも明らかにしよう。

3-3. 「共通概念」と「第二種認識」および「パラダイグム」と「主題化」

「二つの係争からなる二重の錯綜」とLTS2で言われるときの「二つの係争」は、「パラダイグム」と「主題化」からなる。「パラダイグム」[範例]とは、「措定されるものの意味によって要求される現実化に特有な徴」であり、「つまり、連鎖の実現化の特異性のなかでのみ、そのようなものとして肯定される関係のことであり、この関係はこの特異性を任意のものとしてのみ必要とする」のであり、「この関係は特異性を措定しておきながら、それを取り除くことで、変異の内的原理を顕わにする」ものであると説明されている(Cavailles1947a:27=30-31)。これは数学と論理学の事例で考えれば、形式化の最初の一步を意味している。つまり、変化するものと変化しないものあいだの差異を特定することである。たとえば、

$$3 + 4 = 7$$

から

$$a * b = c$$

という抽象代数学における結合則を形式化することもできれば、

$$SSSO + SSSSO = SSSSSSO$$

というペアノ算術公理系において導出可能な定理を形式化することもできる。論理学の場合、たとえば、日常言語では同じ文であるものから、異なる形式化を行うことができる(飯田1989はこれを「パラダイムの推論」と呼ぶ。以下の例は同論文からのものである)。

雨が降っているかまた雪が降っている
という日常言語文は、

$$p \text{ または } q$$

と命題論理的に形式化することもできる。

$$s_1 \text{ は } p \text{ であり、また } s_2 \text{ は } p \text{ である}$$

と述語論理的に形式化することもできる。いずれにせよ、このパラダイグムの形式化において行われているのは、何が可変項で何が定項(不変項)であるかということの最初の設定、あるいは範例の措定であると考えることができる。そして、「もともとの「3+4=7」や「雨が降っているかまた雪が降っている」が何をなしていると我々が理解しているのか、ということとは、「パラダイグム」による形式化なしには明示されない。つまり、理解することとは形式化することなのである。そして、形式化することとは、もとの観念に、その観念の観念、すなわち、観念の本質的部分(つまり可変的な項と不変の項の割り振り)についての観念を重ね合わせることである。そして、まさに、たとえば「pまたはq」が、その総合によって総合されるあらゆる可変項を可能的に含むがゆえに、それは、その可変項の「なにか共通でかつ特有の部分」についての観念、すなわち「共通概念」をなしていると言える。さらにこのとき、カヴァイエスが言うように、「総合は総合されるものと共外延的」(Cavailles1947a)である。つまり、カヴァイエスの言う「パラダイグム」とは、スピノザの言う「共通概念」の形成に関して理解された思惟の作用だと理解することができる。カヴァイエスはこれを、パルメニデス(パルメニデス「*πυρ*」)を引用しながら、「関係の複数性」と関連づけていたことも合わせて想起しておこう。つまり、一つの同じものから、複数の

関係が常に形式化されるということである。

次に「主題化」である。形式化の複雑さが露見するのは、この「主題化」の推論過程が明示的に介入した後である。

LTS4: 「構造のデッサンに、その構造を制御する体系化された規則が重ね合わせられる…。《主題化》は、今度は飛翔のなかでとらえられる連鎖を、あるいは意味のなかで運動する軌道をその出発点とする。思惟はもはや創造される項へとはむかわず、創造する仕方から出発して、他のものと同じ本性に属した抽象化ではあるが、しかし横断的に駆動された抽象化によって、創造の原理をあたえるにいたる。」(Cavailles1947a:33)

「構造のデッサン」に重ね合わせられるべき「その構造を制御する体系化された規則」とは、構文論的な規則を含みながら（しかしそれに還元されない）、その構造の振る舞いを抽象化してとらえることで形成される体系である。言い換えれば、「パラダイグム」によって与えられた形式の出発点となる不変／可変の両項の可能な組み合わせに関する、それ固有の規則である。主題化の結果である「主題系」は、その規則によって展開される体系の新たな平面として理解することができる。たとえば、一つの平面を出発点とした二つのパラダイグムの結果である

$$a * (b * c) = (a * b) * c$$

$$a * b = c$$

は、それを定義するときに、記号の使用規則や記号の外延などを適宜指定することによって、体系化すること、つまり一つの体系に関わって

る規則とみなすことができるようになる。たとえば、この形式における文字記号 a, b, c の外延を、

$$(a_1, a_2, a_3, \dots, a_n \in A)$$

とする。そしてその上で、

$$a_1 * (a_2 * a_3) = (a_1 * a_2) * a_3$$

$$a_1 * a_2 = a_4$$

$$a_2 * a_3 = a_5$$

$$a_1 * a_5 = a_6$$

$$a_4 * a_3 = a_7$$

という仮定が今なりたつものとする。そのとき、先の規則を反復適用するにいたる、

$$a_6 = a_7$$

という式を新たな帰結として（つまり仮定に含まれていない帰結として）導出することができる。つまり、「主題化」とは、「パラダイグム」によって得られた形式（つまり「共通概念」）から出発して、新たな推論を形成することのできる体系を構成する思惟の第二の作用である、と言える。実際、この解釈は、カヴァイエスの参照している例（たとえば、群論、線形作用論、行列論、位相変換のトポロジーなど）(Cavailles1947a:33)とも適合的である（飯田1989は、これを「拡大されたパラダイムの推論」と呼ぶ。ただし、ここでは論理学の問題のみがもつばら考察されている）。

6 【二〇二〇年一〇月の追記】これはつまり、ある振る舞いの本質の把握＝パラダイグムと、把握された本質がもつ振る舞いの把握＝主題化のあいだの差異である。つまり、ある振る舞いは、その振る舞いの全体（可変性と

柴田2005は、「共通概念」と「第二種の認識」の区別を次のように論じていた。

「すなわち、「表象」と「理性」は、われわれの推論過程に適用される思惟の様式に与えられた名称にはかならない。「中略」しかしこの同じ計算(「 2×3 」における \times の値の導出…引用者)が「比例数の共通の性質」を理解してなされたのであれば、それは「第二種の認識」という思惟の様式が適用された推論過程であることにならぬ。」(柴田2005:91)

ここで重要なのは、観念と思惟の様式のあいだの区別に注目することである。思惟の様式が成立するためには、観念の連鎖、つまり観念の自動機械的導出が成り立たなければならない。そして、その基点となるものとして、「一般概念」が関わる場合には「第一種の認識」と呼ばれる思惟の様態であり、「共通概念」が関わる場合には、「第二種の認識」と呼ばれる。そうだとすると、「共通概念」あるいは十全な観念の連鎖には、「一般概念」が関わる不十全な観念の連鎖とは、独立してかつ交わらない平面が不可欠である。つまり、そこでの十全な観念の自動機械的導出(不変性)によってある本質 \parallel 形相因を表現するが、その本質は、それを表現する振る舞いの質料性から解放されることで、固有の平面のうえで独自の振る舞いを引き起こす作用因となることである。形相因が作用因に転化するということ、また作用因の帰結が異なる形相因の表現となること、これが「錯綜」というものを理解させてくれる。このことは、『政治論』における主権の発生と展開の論理にたいしてモデルを提供しているように読むことができる。

に、それ以外の不十全な観念が介入することは「第二種の認識」としての資格の欠落を意味する。言いかえれば、「第二種の認識」という思惟の様式が実現されるためには、「共通概念」を基点としながら、十全な観念のみに関わる十全な観念の連鎖が自動機械的に生み出される平面の形成が不可欠である。先にみた「主題化」とは、このような平面の構成、すなわち「その構造を制御する体系化された規則」の重ね合わせである。したがって、カヴァイエスの言う「パラディグム」と「主題化」の区別は、スピノザの言う「共通概念」と、それを出発点として導出される「第二種の認識」の区別として解釈することができる。

4. まとめ

カヴァイエスがスピノザに付け加えたことはなにか。それは、スピノザの言う「共通概念」と「第二種の認識」に関して、特に科学的方法論(つまり認識論)の観点から、その形成における「産出的能力」とその結果が引き起こす複雑性をそこに認めたことである。そういった形式化による複雑化の過程は、認識する能力の増大を意味しており、そしてこのことは、 $\circ * \text{と} \circ \circ *$ のあいだの差異を肯定する『エチカ』における存在論的な議論によって正当化されると、カヴァイエスは考えていたと解釈することができる。

ところで、カヴァイエスの言う「問題」とは、「乗り越えの要求」である。つまり、ある観念が把握されているとき、その観念の観念、すなわちその観念の「形相的有」を把握する観念によって、その観念が、別の「形相的有」たる「共通概念」を出発点として導出される「第二種の

認識」の帰結となるように、観念の領域を拡張すること、これがカヴァイエスの言う、「進展の意識」によつては把握されえない「意識の進展」である、と解釈することができるように思われる。この「乗り越えの要求」は、明らかに認識論的のみに、つまり制限された人間の精神における観念の観念にたいしてのみ与えられるものである。そして、この「問題」という「乗り越えの要求」が不可避免的に生じることで、それを乗り越えることが正当化されるのは、スピノザ的なC*とC*のあいだの差異を肯定する『エチカ』における存在論に依拠することによつてのみである。これは、明らかに「問題」の存在論的側面を指し示している。したがって、「問題」とは、観念にかんする認識論的側面と存在論的側面の境界それ自体であり、経験における経験可能性の限界を超え出るものを経験のうちになにかしら含むものであると言ふ。これこそが、カヴァイエスが、「スピノザの守護」を要請することによつて擁護しようとした数学的経験の本質であると言ふことができる。

参考文献

- Cavailles1925, « Réponse à l'enquête sur la jeunesse protestante et l'avenir du protestantisme en France », *Foi et vie chaire B* 19261, pp. 130-135.
- Cavailles1938 : Jean Cavailles, *Remarques sur la formation de la théorie abstraite des ensembles*, Série "Actualités Scientifiques et Industrielles", n. 606 et 607, Hermann, rééd. dans Cavailles 1981, pp. 27-176 et 2e édition reprise dans Cavailles 1994, pp. 223-374 引用中の頁数を 1947年の初版のものを使用。
- Cavailles1947a : Jean Cavailles, *Sur la logique et la théorie de la science*, G. Canguilhem, Ch. Ehresmann éd., avec un avertissement des éditeurs, Presses

カヴァイエスのスピノザ主義の再解釈の試み

- Universitaires de France : 2e édition avec une préface de G.Bachelard, Presses Universitaires de France, 1960 : 3e et 4e éditions, Vrin, 1976 et 1987 : 5e édition avec une postface et une bibliographie de J.Sebestik, Vrin 1997 : 4e édition reprise dans Cavailles1994, pp. 475-560.
- Cavailles1947b : Jean Cavailles, *Transfinit et continu*, Hermann, reprise dans Cavailles1981, pp. 255-74, dans Cavailles 1994, pp. 453-72. 引用中のページ数を1981年のものを使用。
- Cavailles1994 : Jean Cavailles, *Œuvres complètes de philosophie des sciences*, B. Huisman éd., Hermann 1994.
- Ferrières2003 : Gabrielle Ferrières, *Jean Cavailles, un philosophe dans la guerre*, Édition du Félin, 2003.
- Gill1993 : Didier Gil, « Le vrai spinoziste. De Brunschvicg à Bachelard », *Actes du colloque « Spinoza au XXe siècle »* (sous la dir. d'O. Bloch), PUF.
- Granger1946 : Gilles-Gaston Granger, « Jean Cavailles ou la montée vers Spinoza », *Les études philosophiques*, 1947, t. 2, pp. 271-279.
- Huisman 1993 : Bruno Huisman, « Cavailles et Spinoza », *Actes du colloque « Spinoza au XXe siècle »* (sous la dir. d- O. Bloch), PUF.
- Sinaceur1984 : Hourya-Bennis Sinaceur, « L'épistémologie de Jean Cavailles », *Critique*, n.461, pp. 974-988.
- Sinaceur1994 : Hourya-Bennis Sinaceur, *Jean Cavailles. Philosophie mathématique*, Presses Universitaires de France.
- Sinaceur2002 : Hourya-Bennis Sinaceur, « Philosophie et histoire », sous la direction de Alya Algan et Jean-Pierre Azéma, *Jean Cavailles Résistant ou la pensée en actes*, pp. 205-224.

- Sinaceur2004 : Hourya-Bennis Sinaceur, « Jean Cavailles : raison immanente », Parrini, P., Scarrantino, L. edit., *Il pensiero filosofico di Giulio Previ*, Guerini e Associati, pp. 353-357.
- Sinaceur2009 : Hourya-Bennis Sinaceur, « Jean Cavailles, Lettres à Etienne Borne (1930-1931), avec présentation par H. B. Sinaceur », *Revue philosophique*, no. 107, Les Éditions de Minuit.
- Yovel1994: Yirmiyahu Yovel, "The Seconde Kind of Knowledge and Removal of Error," in Yovel (ed.), *Spinoza by 2000*,
- スピノザ『エチカ』(上下)、岩波文庫、二〇一一年。
- スピノザ『知性改善論』、岩波文庫、一九六八年。
- カヴァイエス2013: ジャン・カヴァイエス(近藤和敬訳)『構造と生成Ⅱ 論理学と学知の理論について』、月曜社、二〇一三年。
- 飯田1989: 飯田隆「現代論理学が伝統的論理学よりもすぐれていると考えるのはなぜだろうか」、一九八九年。
- 上野2005: 上野修『スピノザの世界 神あるいは自然』、講談社現代新書、二〇〇五年。
- 近藤2011: 近藤和敬『構造と生成Ⅰ カヴァイエス研究』、月曜社、二〇一一年。
- 柴田2005: 柴田健志「スピノザの数学」『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』六一巻、八七-一〇二頁、二〇〇五年。
- 中村2013: 中村大介「概念とは何か、何であるべき——カヴァイエスの哲学における「概念」とその「刷新」——」、『フランス哲学・思想研究』、第一八号、二〇一三年。
- 松田2009: 松田克進『スピノザの形而上学』、昭和堂、二〇〇九年。